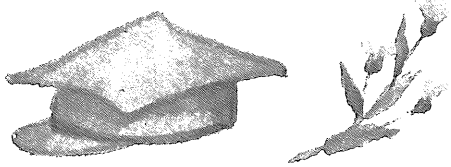
大学入試の歴史（第38回）

予備校の歴史(2)
――予備校の起源ア・ラ・カルト――



名古屋大学教育学部教授
佐々木　享

官立学校進学をめざす予備校が主流

1900年以前の東京には，すでに，高等中学校をはじめとする諸官立学校への入学あるいは各種の免許取得をめざす者のために，さまざまなタイプの予備校が存在した。東京英語学校のように，英語，数学，漢文の教授に重点を置き，さらに尋常中学校並みの諸科目をも開講して，最も威信が高いとみられた高等中学校への入学準備をする学校が当時の予備校の主流であった。高等中学校への入学準備は，他の諸官立学校のそれに通ずるものとみられたからであろう。なお，当時の東京にあった官立学校としては，帝国大学のほか次のような学校をさすことが多かった（前掲『東京諸学校一覧』による）。

東京農林学校	海軍主計学校	第一高等中学校
陸軍士官学校	海軍医学校	学習院
陸軍幼年士官学校	高等商業学校	東京高等女学校
海軍兵学校	商工徒弟講習所	東京職工学校（東京工業学校）

軍隊の学校の予備校

特定の学校への入学準備を標榜する予備校もあった。たとえば，1870（明治３）年という早い時期に開校した攻玉社（現在の攻玉社高等学校の前身）のほか，「海軍予備校」を名のり（1891～1899年），のちに日比谷中学校と合併した海城学校（現在の海城高等学校の前身）は海軍兵学校の予備校であった（『東京の中等教育三』61頁）。また成城学校，有斐学校は，陸軍士官学校や陸軍幼年士官学校の予備校たることを自認していた。なお1895（明治28）年の『諸学校規則集』に登場する徳育館は，「陸軍武学生徒ノ予備教育」を行うだけでなく，「兼テ私立成城学校ニ入ル予備科ヲ授ク」としており，いわば予備校の予備校でもあった。

東京工業学校の予備校

1888年の『東京諸学校一覧』によると，「農林学校予備校」を名のる学校があった。当の東京農林学校は1890（明治23）年６月に帝国大学に吸収されてその農科大学となったので，この予備校は消滅したものとおもわれる。

これよりさき，天保６（1835）年に福田理軒が大阪に開いた順天堂塾は，1871年（明治４）年に東京に移転して「順天求合社」を名のった。専ら数学，測量術を教授していたが，88（明治21）年より東京工業学校の別科と称して同校進学のための予備科を開設した。この予備科は99年６月に廃止された。順天求合社は94年に尋常中学順天求合社となり，1900年には順天中学校

と改称した。今日の順天高校の前身である(『順天百五十五年史』1989年，による)*。このほか，むしろ後の中等実業学校程度とみられる高等商業学校附属商工徒弟講習所（のち1890年に，東京工業学校附属職工徒弟学校となる。今日の東京工業大学工学部附属工業高等学校の前身）のための予備校すらあった。

＊筆者はかって東京工業学校の入試制度の変遷を調べたことがあり（拙稿「東京高等工業学校の入学者選抜制度の歴史」『名古屋大学教育学部紀要——教育学科』第32巻，1986年），その概略を本連載第２回でものべた。しかしその執筆当時は，順天求合社の存在やその役割に気づいていなかった。

中等教員免許をめざす予備校

夏目漱石の「ぼっちゃん」の主人公もそうであったように，戦前の中等学校（正確には師範学校，中学校，高等女学校）の物理や数学の教師には東京物理学校出身者が多かった。この学校は，東京大学出身の新進の理学士があい寄って1881（明治14）年に創立した東京物理学講習所に始まり，83年に東京物理学校と改称したものである。和漢学，英学，法律学を講ずる私立学校創設が続いた頃に，数学，物理学という近代科学を専門に教授した異色の学校であった（今日の東京理科大学の前身）。ところで，東京物理学校の高等師範科卒業者に中等学校教員免許の無試験検定の指定が与えられたのはずっと後の1917（大正６）年であり，それ以前の東京物理学校卒業者は試験検定を経て中等教員免許を取得しなければならなかった。換言すれば東京物理学校は中等教員免許取得の予備校だったわけである。なお，のちの1900年には，この東京物理学校内に「官立学校予備校」が開設されている（関口，前掲論文，245頁）。

中等学校体操教師の予備校

体操は，近代日本の学校教育に持ち込まれた全く新しい教科の一つだった。文部省はリーランドの指導下に体操伝習所を創設(1878～1886)するなど，この新教科の普及につとめた。日高藤吉郎はこの教科の教師養成の必要性に着目して，1891（明治24）年に体育会（翌92年に日本体育会と改称）を創立した。同会は93年より体操練習所の授業を開始した。同所卒業生は95年より東京府などから小学校体操正科教員の資格を与えられただけでなく，中等教員検定試験に合格する者があいついだ。同所はいわば中等学校の体操教師免許取得の予備校であった。

同会は1900年に日本体育会体操学校と改称し，教育組織も整頓した。同校は各種学校ではあったが(専門学校となるのは1941年)，その本科卒業生には中等教員体操科の無試験検定の受験資格が与えられるようになった(『学校法人日本体育会　日本体育大学八十年史』1973年)。

医術開業試験の予備校

明治維新後，新政府は早くから西洋医学の採用を決めたものの，医師資格の整備と医師養成は近代化途上の難題の一つであった。東京医学校とその後身の東京大学医学部ー帝国大学医科大学を中軸とし，その卒業生を擁する公私立医学校を中心として医学教育制度の整備を始めたものの，これで医師の供給が間に合う筈はなく，長い間，従来の漢方医とそのもとで修業した者の開業を認めなくてはならなかった。すなわち，上記の学校以外の場で医学を修業した者で新規に開業しようとする者には，1875(明治８)年以来試験により許可を与える制度が設けられた。1884（明治17）年から施行された医術開業試験

規則による試験は，前期試験（基礎科目）と後記試験（臨床学科，薬物学及び臨床実験）に分けて実施された（この試験は1916年まで実施された）。

各地にこの医術開業試験受験のための予備校が生まれた。1876（明治９）年に長谷川泰が開設した私立医学校済生学舎もそのひとつであった（神谷昭典『日本近代医学の定立』1984年，209頁）。同校は，1900年頃には，「生徒の多きこと千二百余名我国学校中此校の右に出づるものなし且つ毎年此校より医士を出すこと少なからず実に私立学校中の模範と為す」とまでいわれた（研玉社編『新編日本游学案内』1900年，86頁）。1903（明治36）年８月，長谷川が済生学舎廃校を決めた時，新聞は，全国の開業医１万4800余人中の半数はこの学校の出身者だと伝えていた（神谷，前掲，203頁。ただし『医制百年史・資料編』1976年によると，1903年の医師総数は３万４千余，うち試験及第による者は10,942名であり，上記数字には誇張がある）。

女医への予備校――東京女医学校のことなど

ところで官公立の医学校は女子の入学を拒否していた。萩野吟子は東京女子師範（のちの東京女高師）を経て，女医になるために私立医学予備校のひとつである好寿院に学び，女性に医術開業試験にを受けさせる道を拓き，1885（明治18）年に医術開業試験に合格した女医第１号となった。吟子が切り拓いた苦難の道はよく知られている（1970年に河出書房新社から刊行され，のちに『新潮文庫』に収録された渡辺淳一『花埋み』は，吟子の生涯を描いた名作である）。

前述の済生学舎はまた，先覚的な女性の熱意にほだされて，女性をも入学させていた。鷲山（のち吉岡）弥生もこの学舎に学び，1890（明治23）年４月に医術開業試験の前期試験に合格，92年10月に後期試験に合格した。鷲山はさらに吉岡荒太の独逸学校至誠学院に通ってドイツ語を学んだ。95年10月，２人は結婚した。吉岡の学院はやがて英語，漢文，数学をも開講して官立学校への予備校となったけれども，経営はおもわしくなく，くわえて荒太が糖尿を病むに至ったので99年秋には閉鎖した。

翌1900年９月，済生学舎は風紀問題等を理由に女子の入学を拒否するに至った。吉岡弥生は，女性の医師への道がなくなることを憂い，同年12月，開業の傍ら東京女医学校を開設した。生徒数僅か４名で出発した同校の実態は，医術開業試験をめざす私塾であった。生徒の増加に伴い1904年には修業年限４年の私立の各種学校となったが，実態は医術開業試験予備校であった。同校は，1908（明治41）年６月，最初の卒業生（竹内茂代唯１名）を出した。竹内は同年２月に後期試験に合格しており，同校で学んで医師となった最初の女性でもあった。

吉岡夫妻の努力で1912年には東京女子医学専門学校設立が認可された。他方，受験予備校としての東京女医学校は，医術開業試験がなくなる1915年まで存続した。東京女子医専の卒業生も当初は試験を受けなければならず，彼女らに医師試験の無試験検定の指定を与えられたのは1919年であった。ここに至って，東京女子医専は予備校の性格を完全に失い，名実ともに医学専門学校となった（『東京女子医科大学八十年史』1980年）。

もちろん，女性を受け入れた医学予備校はほかにもあった。たとえば志賀ミヱは，1902（明治35）年から岩手医学校（岩手医科大学の前身）に学び，のち上京して女子医学研修所→東京医学校（日本医科大学の前身）という学習歴を経，

1904年に前期試験，1909年に後期試験に合格して開業医となった。志賀ミエのたどった苦難の道は，日本エッセイスト・クラブ賞に輝いた志賀かう子『祖母，わたしの明治』（初版は1978年，のち河出文庫所収）に克明に描かれている。

研数学館の創立

現在の予備校のなかではもっとも古い歴史をもつといわれる（関口，前掲，247頁）研数学館について同館発行の『資料と写真でみる研数』（1989年）は，1897（明治30）年に奥平浪太郎が数学専門の私塾を創始，上級学校進学志望者のための予備校として認められたと記している（2頁）。同冊誌所収の1903年の新聞広告によると，数学のみならず，物理，化学，英語の通信教授（館外生）を募集しており，この頃すでに数学以外の科目をも開講する予備校となっていたものとみえる。関口によると1906年には官立学校受験準備の普通科のほかに，中学校初学年程度の別科，中学校3・4学年程度の補習をする初等科を開設しており，大正初年の生徒数は800名を越えていたという。後述のような私立大学附設ではない本格派の予備校が誕生したのである。

関東大震災で建物が壊滅したのを期に経営者が片山鬼作に替り，1929年には鉄筋コンクリートの新校舎（現本館）を完成，予備校としての地歩を固めた。1941年に財団法人研数学館を設立，同時に戦時下の理工系技術者養成拡充の要求に応える研数専門学校を開設した。戦後，専門学校が廃校となると大学受験専門の総合予備校として再発して今日に至っている。歴史の古さだけでなく，経営主体が財団法人だという点でも異色の予備校である。

私立大学附設の予備校誕生

予備校の歴史については，1900年代（あるいは明治30年代）に画期をもとめる論者が多い。それは，この時期に，官立の高等学校，専門学校の制度がほぼ整備されるとともに，公私立の中学校も整備拡充され，その卒業生が急増すると，中学校から高校に入学するための入試がにわかに厳しくなり（本連載第3回参照），急速に中卒後の受験浪人が顕在し，これに照応する如くに，受験浪人に焦点をあてた予備校が叢生したからである。その象徴が，この時期に陸続した私立大学（制度上は専門学校）付設の予備校の誕生であった。

1900年代に入って私立大学が経営に乗りだした予備校を創立年代順に並べると次の如くである。

中央高等予備校（中央大学内）	1905年
日本高等予備校（日本大学内）	1906年
明治高等予備校（明治大学内）	1907年
東洋高等予備校（東洋大学内）	1908年
東京高等予備校（法政大学内）	1910年

＊早稲田高等予備校（1903年創立，現在の早稲田予備校との継承関係はない）は，早稲田大学との経営上の関係はなかったらしい。

私立大学附設の予備校に学んだ者は，当該大学への進学をめざす者ではなく，高等学校をはじめとする官立学校をめざす者であった。その講師陣としては，当該大学の教師だけでなく，府下の官立学校の教師たちも多数動員されていた。

しかし，私立大学附設の予備校は，1920（大正9）年以降，私立大学があいついで大学令による私立大学に昇格すると，次々に廃止されていった。需要がなくなったからではなく，大学としての体面を顧慮したためらしい。